

21 旧鈔本『難経集註』にみえる「持」の訓について

宮川 浩也¹⁾, 矢吹 杏子²⁾, 天野 陽介³⁾

¹⁾北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部 客員研究員

²⁾北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部 一般研究員

³⁾北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部 上級研究員

1. はじめに

旧鈔本『難経集註』は、室町末～江戸初にかけて抄写されたものと考えられ、今まで『難経集註』の祖本と見なされていた慶安5年本（1652年刊）を遡る史料として、斯界の注目を集めている。該本は、経文・注文の校勘史料だけでなく、経文・注文にまんべんなく付された訓点は、慶安本以前の古い訓点として解釈上極めて貴重と考えられるので、「持」字を対象に初歩的な検討をした。

2. 資料

資料は北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部刊本（2010年）を用いた。なお訓のあとの数字は、巻数・丁次・表（a）裏（b）を表す。

3. 「持」の訓について

①「トリ心ミテ」1-14a

4難の丁徳用の注「持三部脈中」に対する訓。「トリココロム」は「診」の訓としても採用されているから、「持」を「診」と見なしたものと考えられる。「トリココロム」は、脈を「執り試む」であり、診断の初めの脈診を指し、治療後の確認としての脈診は「切（タシカニス）」と、幻雲注『史記』扁鵲倉公列伝（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部刊）にも見える。

②「サクルコト」1-15a

5難の本文「初持脈」に対する訓。単に脈の形状を診るのとは違って、指の圧を加えながら脈の深さを「探る」という意味であろう。単に脈の形状を診るのと区別したものと思われる。なお「サグル」は「循」の訓としても採用されている。

③「モツテ」3-10a

49難の虞庶注「持重」の訓。重いものを持ち上げての意。

④「トルコトヲ」4-23a

61難の本文「診其寸口」を丁徳用は「持其寸口也」と、つまり「診」を「持」と解釈した結果「トル」と訓じたものと思われる。①の「トリ心ミテ」と異なり、単に「脈をとる」の意。

⑤「ツカフ」5-13a・5-15b

70難の本文「得気引持」の訓。深くまで指して気を得て、鍼を引き上げながら操作するの意。また74難の丁徳用注「持鍼」の訓。ここでは鍼を操作するの意。

4. まとめ

以上のように「持」に5種類の訓がみられたが、「トリ心ミテ」「モツテ」以外は、築島裕『訓点語彙集成』（汲古書院）にも見られないもので、おそらく付訓者か、或いはそれに先んずる者が、文意を案じて訓をつけたものと考えられる。

古鈔本の訓点は、慶安本の訓点とも異なるもので、訓点もひとつの解釈であるから、『難経』研究史に確かに位置づける必要があると思われる。